



ニクラス・ルーマンの宗教社会学

畠中, 茉莉子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7958号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007958>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 要 旨

氏 名 島中 茉莉子
専 攻 グローバル文化
指導教員氏名 上野 成利 教授

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

ニクラス・ルーマンの宗教社会学

論文要旨

本研究は、ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann, 1927-1998) による社会論の中で、後期のものと称される議論、とりわけ彼の宗教社会学に焦点を当て、その詳細と展開を明らかにするものである。

第 1 章においては、まず日本とドイツにおけるルーマン研究の近年の研究動向を紹介した上で、今日において、彼の宗教社会学を主題として取り上げることを意味を提起する。ドイツの研究の動向と比較した場合、日本においては、彼のサイバネティクス、情報論、そして機能分化論に基づく前半期の社会システム論の概要はこれまでに広く紹介されてきたものの、彼の中でも 1970 年代後半から 1980 年初頭以降の後期のものと称される諸々の議論を念頭に置いた研究は、まだそれほど広まっていない。すなわち、ゼマンティック、社会の部分システム論、そして包摂と排除といったトピックである。この後期に付加される論題が、彼の前期の議論に適合的か否かは、今日徐々に論争的問題となりつつある。本研究は、このうちのゼマンティックと、それを前提とした彼の宗教論に焦点を当て、その意義を問うものである。日本では、彼の宗教社会学の紹介は、これまで本格的に試みられることはなかった。ドイツにおいては、彼の宗教論をめぐる研究の蓄積はあるものの、そのクロノロジー的展開を踏まえたものはまだない。

第 2 章においては、ルーマンにおける「社会と理念 (Idee)」をめぐる思索についての考察を行う。これは、彼の宗教社会学の理論的な前提となったものであり、彼のゼマンティックに深く関わるものである。ここでいうゼマンティックとは、社会で培われてきた高度な意味の形式のことであり、この形式のうちで最も抽象度の高いものが、理念と称される。この章では、彼がこの理念の概念をシステム理論へ導入しようとした、その一連の過程を論じている。その過程を通じて、彼の社会の機能分化論は、さらに精緻なものとなり、社会の部分システム論という大きな課題がそこに開かれることになった。彼の宗教論は、この社会の部分システム論の一つである。

第 3 章は、ルーマンの宗教ゼマンティック論、すなわち「宗教の分出」(Luhmann 1989) を扱ったものである。彼は宗教におけるゼマンティックの歴史を古代社会から近代社会の成立期にかけて描写しようとした。彼の議論は多数の歴史的資料を用いる複雑なものではあるが、その反面、彼が宗教として具体的に想定していたものを知るための手がかりとなる。それゆえに、この章ではこの論文に対する詳細な解説を試みている。そうする中で、彼の宗教論を捉えるための三つのトピックが浮かび上がってくる。すなわち、機能、コード、そして世俗化である。第一のものは、宗教が社会の中で果たす一定の機能

である。そして第二のものは、この機能を一定の意味形式の形で担い、表現するもの、すなわち理念である。この理念がシステムの作動にとって有効な二値的な形式を探るようになると、それはコードと呼ばれる。そして第三のものは、近代社会における現実の宗教のあり方を描く世俗化である。

第 4 章で扱う世俗化論は、ルーマンが宗教の機能とコードという他のモメントを論じるための前提となっている。彼の世俗化論には、1977 年版と 2000 年版をはじめ、書かれた年代がかなり離れた複数のバージョンがある。この複数のバージョンを比較することによって、我々はルーマンが同時代の神学者や宗教社会学者の動向を踏まえ、宗教に対する自身の見解を徐々に変化させていったことを把握することができる。この過程を通じて、彼は近代から現代、そして未来の社会における宗教を論じるための観点を準備しようとしたのである。

第 5 章では、晩年のルーマンが、現代と将来の社会における宗教の様態を、いかなる形で構想ないし予想しようとしていたのかを示す。彼の宗教論における三つのトピックのうち、ここでは機能と、理念が特定の二値的な形式へと結晶化したものとしてのコードを扱う。彼は、何よりも機能システムにおけるコードの特定を優先した。彼の遺作の一つ『社会の宗教』(Luhmann 2000) は、彼の死後に、残された草稿を編者が本の形でまとめた未完の書である。そのため、彼の晩年の宗教についての論述は、断片的なものに留まっている。この章では、この断片的な像に込められた方向性を際立たせるために、ルーマンの影響を強く受けながらも、それぞれ独自の宗教についての議論を示した N・ボルツと H・ティレルの議論を比較項として参照する。彼らの示した宗教論と比較することで、そしてその差異を踏まえることによって、ルーマンが提起しようとした、現代と未来の社会において個別システムとして存続する (はずの) 宗教なるものについての考え方に一定の理解が得られることになるだろう。本研究は最後に、この宗教社会学研究がルーマンの、とりわけその後期の社会学理論の中で持つ、その理論の成立に与った正負両義的でもあった意義を検討する。(以上 1999 字)

【課程博士用】

論文審査の結果の要旨

氏 名	畠中 茉莉子		
論 文 題 目	ニクラス・ルーマンの宗教社会学		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
論文チェック ソフトによる 確 認	☒ 確認 ☐ 未確認 理由：		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	委 員 長	教授	市田 良彦
	委 員	教授	上野 成利
	委 員	神戸大学 名誉教授	應 茂
	委 員	横浜市立大学 准教授	渡會 知子
	委 員		印
要 旨			
別紙のとおり			

■本論文は、現代社会学における最重要理論家の一人であるニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann, 1927-1998）の宗教社会学に関する包括的な研究である。彼の社会学理論の基盤は、政治、法、経済、科学、芸術などに社会が機能的に分化していくという、いわゆる機能分化論である。ルーマンはこの理論を構築するため、当初サイバネティクスや情報論を援用していたが、そこに現象学や解釈学における意味理論——歴史的・概念史的なゼマンティック——の発想を重ねていく。ルーマンの思想においては、宗教は独自の個別システムとして、他の諸機能と併存しつつ分化していくことになっている。とはいえ、政治や経済と違い、ルーマンにとって宗教の個別システムとしての存立は自明の与件ではありえなかった。宗教がいかなる形で機能的に分出し、現在においてなお分化的に存続しているか、この主題にルーマンは最晩年に至るまで難渋し続けた。日本ではルーマン社会学に宗教論が含まれること自体は知られているものの、研究論文数はいたって少ない。G.ジンメル、M.ウェーバー以来の宗教社会学の伝統をもつドイツでは研究の数は相応に存在しているが、そうした研究は総じて各論者がコミットする論争的な関心から部分的トピックに焦点を当てた議論にとどまっている。ルーマンの宗教社会学の全容を概括しようとした研究はいまだ内外において存在していない。本論文はその欠を埋めようと企図したものである。

■論文は全5章からなる。論文構成の軸は、ルーマン宗教論の理論的視座の確定、宗教の歴史的ゼマンティック、そして近現代における宗教システムの存立様態という三つのステップからなっている。

第1章〈ルーマンと宗教社会学〉 研究史における論文の意義が説明される。ルーマンの宗教論をめぐるのは、とりわけ1970年代後半以降のルーマン後期といわれるゼマンティック論を踏まえた解説が鍵となることが明らかにされる。

第2章〈社会と理念〉 ルーマンの宗教論全体を支えている理論的視座を抽出し、確定しようとする。宗教にかかわる諸論考をクロノロジカルにならべるだけでは、ルーマンの宗教論を確定するには至らない。確定のためにはまず、彼が宗教を論ずる際の理論的視座の特定が不可欠である。本章はそれを「(機能分化していく)社会と(それに適応し、「共進化」していく)理念」の関係論であると見定める。そこでは、社会に内在する理念の進展論とそれを機能分化論に依拠して観察する「理念の進化」論とが二重に交錯していると指摘される。そしてこの視座の準備と彫琢の前提として、J.ハーバーマスとの論争ならびに R.コゼレックなどの概念史の批判的摂取が重視される。とりわけ、後者の概念史派をルーマンがいかに自身の理論に適合するよう翻案したかが考察される。

第3章〈宗教のゼマンティック〉 ルーマンはそのゼマンティック論において、古代社会から近代社会の初期まで、宗教的理念（主としてキリスト教）の歴史を社会の機能分化への進化論的適応のプロセスとして論じている。その議論はきわめて晦渋な文章によって語られており、本章ではその概要の把握が目指される。ルーマンは、前近代における宗教コスモロジー、中世から近世にかけての聖と俗の二値論、宗教と道徳の関係と相互の離反プロセスなどを、宗教のゼマンティックとして辿っていく。この議論はプロテスタンティズムの「超越の内在」論のところ

で中断しているが、ルーマンは「超越の内在」によって近現代の宗教を語りつくせるとは考えていなかった。

第4章〈二つの「世俗化」論〉 ルーマンは、近現代社会における個別システムとしての宗教の機能と理念、その理念が結晶し固定したものとしてのコード（彼が好んで使う情報論的用語）の解説に取り組み続ける。その中心的論点の一つが、宗教の世俗化をどう考えるかであった。ルーマンの世俗化論をめぐるテキストは複数あり、内容的に微妙に重なりかつ相違している。本章は世俗化をめぐる思索の背景に、神学者たちとの対話ならびに同時代の宗教社会学の展開に対する配慮を見ることで、世俗化論の論旨と変容の意義を読み取ろうとする。ルーマンは世俗化を、宗教の衰退ではなく、存立の様式の無定形なコミュニケーション的拡散として捉える。そのさいキリスト教を中心とした彼の視座は相対化されるが、それによって現代における宗教性という問題が生ずる。

第5章〈現代の宗教〉 ルーマンは、社会の他の諸システムと併存する宗教システムの機能と理念、コードを模索し続ける。その思索は難渋を極め、未完に終わる。本章では、ルーマン自身が意識していたジンメルとウェーバーの宗教論との関係と相違に言及しつつ、そうした断章的議論の解説が試みられる。大変に難易度が高く、そもそもいったい何を問題として語っているかの確認自体が困難な断章群の解説にあたって、本章では、主題的位相の特定のため、ルーマンの影響と継承を明言している N ボルツのカルト・マーケティング論と H.ティレルのキリスト教的「信」をめぐる議論を対比項として援用する。その結果、ルーマンの狙いは、政治や経済と併存しうのような、キリスト教色を抑えた、しかしその進化論的な継承形態といえる高度な理念形式をもつ宗教を仮想することにあった点が指摘される。「意味の意味」の根源の様態ともされる二義性——偶発性・逆説性・多義性の凝縮した「マークされた／マークされない」という二値的コード——によって特徴付けられる仮想「宗教」である。

結び〈機能分化論の拡充か、それとも破綻か？〉 ルーマンの宗教論は機能分化論に十全には収まり切らない側面をもつ。その局面を彼は最後まで思索から排除せず、考え抜こうとした。その営為を機能分化論の破綻や逸脱としてではなく、拡充として捉える方向が示唆される。

■本論文は、日本においてはむしろ、ドイツにおける関連研究も含め、ルーマンの宗教社会学を包括的に主題化した初めての研究である。宗教と交叉する法や道徳、教育、芸術のシステムをめぐる議論への目配りは十分とは言えず、ジンメル、ウェーバーの世代から現代にいたるドイツ宗教社会学全体におけるルーマンの位置という問題も、問題提起的な水準にとどまっている。とはいえ、本論文は宗教をめぐるルーマンの議論をきわめて広汎かつ深く読み込んだ「ルーマンの宗教社会学：序説」とでも形容すべきものであり、内外のルーマン研究の重要な欠損を埋める高い学術的価値を有していると判断できる。

以上の観点から本審査委員会は、申請者の畠中茉莉子氏が博士（学術）の学位を得る資格を有すると認定する。なお、申請者は他に査読付き論文3篇を公刊していることを付言しておく。